

## 審査の結果の要旨

氏名 田村 大輔

本研究は小児インフルエンザ患者への抗インフルエンザ薬治療に伴う薬剤耐性ウイルスの出現や流行状況を明らかにするため、小児インフルエンザ患者から採取された臨床検体を使用し、ウイルス遺伝子と薬剤耐性ウイルスの酵素活性の解析を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. オセルタミビル治療は、ザナミビル治療に比べ、上気道からのウイルス排泄期間が長引くことにより、高率に薬剤耐性ウイルスが出現することが明らかになった。
2. 出現したオセルタミビル耐性ウイルスは、全ての症例で治療開始4日目以降から出現し、時間経過とともに、検体の中で耐性ウイルスの占める割合が高くなる傾向があることが明らかになった。
3. 2007-2008 インフルエンザシーズンの日本国内の小児インフルエンザ患者においてオセルタミビル治療前の 1.5% (3/202 検体) がオセルタミビル耐性ウイルスであり、これらのオセルタミビル耐性ウイルスは、北欧・北米由来と、日本で耐性化した遺伝的に異なる 2 系統が存在することが示唆された。

以上、本論文は、これまで未知に等しかった小児インフルエンザ患者における抗インフルエンザ薬の薬剤耐性ウイルスの出現頻度や流行状況を明らかにした。本研究は、インフルエンザウイルスの薬剤耐性化の解明に貴重な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。